



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 27

Nov. 2007

目 次

会費滞納者の除名について.....	2
会費納入のお願い.....	2
諸報告.....	3
日本植物分類学会 2007 年度第 2 回評議員会議事抄録.....	3
庶務報告 (2007 年 8 月～10 月)	5
植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウムの報告.....	5
日本植物学会第 71 回大会「第四紀における日本列島フロラの成立過程 ～Refugia はどこに?～」感想記.....	6
お知らせ.....	6
日本植物分類学会第 7 回大会および 2008 年度総会のご案内.....	7
2007 年度日本植物分類学会講演会のご案内.....	12
2008 年度野外研修会開催地の募集.....	14
ハーバリウム紹介.....	14
九州大学のハーバリウムと所蔵植物標本のご紹介.....	14
いきもの便り.....	17
世界遺産の遺産に	17
チイ便り・5 ～トナカイゴケを食べるトナカイの秘密～.....	18
日本植物分類学会第 7 回大会「発表・参加申込書」.....	19
会員消息.....	20

会費滞納者の除名について

会長 邑田 仁

学会の運営は皆様の会費を基に行われておりますが、会費を滞納される方が少なからずおられます。本学会の会費は前年度納入を基本としておりますので、お忘れになりませんようによくお願いいたします。滞納がありますと、経済的な問題が生じるのはもちろんのこと、出版物の発送停止と解除、通常の連絡以外の督促状の発送など、事務的な負担も大きくなり、学会運営に支障をきたすことになります。本学会では2005年に滞納会費回収の特別活動を行い多くの方から会費を納入して頂くことができましたが、その後また滞納された結果4年以上の長期滞納となっている方がおられます。該当する方には督促状を差し上げておりますが、もし2008年2月末日までに未納会費の納入が無い場合、3月の大会時に開催される評議員会の議決を得て、除名とさせていただきます。

学会としましては、除名を発動することはきわめて残念なことでありますので、会費納入のうえ会員として継続されることを希望しております。ぜひともよろしくお願い申し上げます。

会費納入のお願い

会計幹事 海老原 淳

本学会の会費は前納制で、前年の12月末日までにお納め頂くことになっております。会員の皆様の会費納入状況はニュースレター本号の送付宛名の右下に「納済年度：〇〇〇〇」として示されております(自動振替をご利用の方は数字の代わりに「自動振替」と記入されています)。例えば、「2006」の方は2007,2008の2ヵ年分をお納めいただくことになります。この数字が2008未満の方は、2007年12月末日までに同封の郵便振替用紙にて、該当する金額を納入頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

- 年会費 一般会員 5,000円, 学生会員(※) 3,000円, 団体会員 8,000円
- 郵便振替口座 口座番号 00120-9-41247
 加入者名 日本植物分類学会

本学会では自動振替をご利用頂けるようになっております。ご希望の方は、会計幹事までお知らせください。ただし、2008年度分の引き落とし手続きはすでに終了しておりますので、ご利用は2009年度分からになりますので、ご了承下さい。

その他、会費納入に関してご不明な点がございましたら、会計幹事(連絡先はニュースレター巻末)までお問い合わせください。

※2007年度第2回評議員会において、これまで必ずしも明確でなかった「学生会員」の取り扱いが明確にされました(xxページ参照)。例えば、学振DCの方は基本的に一般会員扱いとなります。会費振替用紙通信欄に指導教員のサインがない場合、学生会員とは認められません。不足分は未納会費として取り扱われますのでご注意ください。自動振替を利用されている学生会員の方は、前年度末(2008年度分については2007年12月末日)までに、指導教員から会計幹事宛に学生会員であることを承認する旨のメールを送信してください。

諸報告

日本植物分類学会 2007 年度第 2 回評議員会議事抄録

庶務幹事 五百川 裕

会場：東京理科大学野田キャンパス講義棟 G 室

日時：2007 年 9 月 8 日 12:00～13:30

参加者

評議員：() 内は被委任者

出席 (9 名)：梶田 忠，黒沢 高秀，高宮 正之，出口 博則，永益 英敏，野崎 久義，藤井 伸二，村上 哲明，綿野 泰行

委任状出席 (3 名)：田村 実 (議長に委任)，西田 佐知子 (黒沢高秀氏に委任)，西田 治文 (議長に委任)

幹事会・委員会委員長：() 内は役職

出席 (8 名)：邑田 仁 (会長)，五百川 裕 (庶務)，海老原 淳 (会計)，東 隆行 (ニュースレター)，坪田 博美 (ホームページ)，永益 英敏 (英文誌編集)，秋山 忍 (和文誌編集)，菅原 敬 (植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合)，

欠席 (8 名)：鈴木 武 (図書)，岡田 博 (編集委員長)，西田 治文 (自然史学会連合，学会賞選考委員会)，布施 静香 (講演会)，柏谷 博之 (絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会)，大橋 広好 (国際植物命名規約邦訳委員会)，矢原 徹一 (絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会)，伊藤 元己 (植物データベース専門委員会)

1. 評議員会開催にあたり，邑田会長から挨拶があった。
2. 五百川庶務幹事により，定足数が確認された。会長・評議員出席 10，委任状出席 3 で本評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として梶田忠氏が選出された。議事録署名人として出口博則氏と永益英敏氏が選出された。
4. 報告事項
 - 4.1 学会賞選考委員会について 西田治文委員長のほか 6 名の委員を委嘱。ニュースレター 26 号で受賞候補者募集の公示。
 - 4.2 日本植物分類学会講演会について 平成 19 年度講演会は 12 月 15 日 (土) に兵庫県立人と自然の博物館において「Flora of Japan」をテーマとして開催。
 - 4.3 各種委員会に関する報告
 - (1) 編集委員会 英文誌『APG』，和文誌『分類』の編集状況。『APG』の電子投稿開始。ISI 登録は未申請。
 - (2) 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会 環境省公表のレッドリストの概要。
 - (3) 国際植物命名規約邦訳委員会 12 月刊行予定。ニュースレター 26 号で案内済み。
 - 4.4 庶務関係報告 転載許可申請への対応等。
 - 4.5 会計関係報告 海外からの会費納入促進，手数料軽減の方策を検討中。
 - 4.6 ニュースレターに関する報告 発行，編集状況。

5. 審議事項

5.1 大会発表者の資格について

邑田会長より、前回評議員会までの議論を踏まえた事務局原案が提案され、審議の結果、「大会発表者のうち講演者（口頭発表およびポスター発表で話をする者）は会員であることを原則とする。」ことが承認された。

5.2 学生会員の資格について

邑田会長より現状を考慮した事務局原案が提案され、審議の結果、「自活できる給与所得が無く、学生（研究生を含む）の身分があることを学生会員資格の原則とする。（例えば、学生の身分があっても、日本学術振興会特別研究員として研究奨励金の支給を受けている等、自活できる給与所得が有ると認められる場合には、該当しない。）ただし、給与所得についての詳細基準は、多様な支給形態や生活条件等を考慮して一律に定めることが困難なため、適否の判断は指導教員に委ねる。したがって、学生会員の会費納入については、指導教員にサインをしてもらい口座振り込みで行ってもらうことを原則とする。自動引き落とし手続きの場合には、指導教員から学生会員承認のメールを会計幹事に毎年送信してもらう。」ことが承認され、事務局内規とすることとなった。

5.3 会費滞納者への対処について

海老原会計幹事より、長期会費滞納者の状況について説明があり、2006年度に行なった長期会費滞納者への対応に従い、4カ年分以上滞納の会員に除名手続きを進めることが提案された。審議の結果、先例通りに、期限を定めた督促状送付、ニュースレターでのお知らせ、電話またはメールによる直接連絡等の十分な対応を行なった上で、納入されない場合には、2008年度第1回評議員会において除名を決定することが承認された。

5.4 交換・寄贈図書の管理について

五百川庶務幹事より、学会の交換・寄贈図書の管理の現状（兵庫県立人と自然の博物館に仮保管）と過去の経緯、問題点について説明があった。2006年第1回評議員会以降の議論を踏まえ「図書のうち、兵庫県立人と自然の博物館が受入れるものについては、学会員の閲覧希望に対応することを条件に、兵庫県立人と自然の博物館に寄贈する。」ことが原案として提案され、審議の結果、寄贈図書リストを整理した上で、2008年度第1回評議員会および総会で了承を得て寄贈を行なうことが承認された。

5.5 学会メーリングリストの新設について

坪田ホームページ担当幹事より、今年度第1回評議員会で検討する方向が承認された、公式メーリングリストの整備について、具体的な業者の見積もりを示した提案がなされ、今年度中に設置することが承認された。

5.6 日・韓・中3カ国植物分類学会連合国際シンポジウムについて

邑田会長より、韓国分類学会国際シンポジウムで提案された、日本、韓国、中国3カ国の植物分類学会の連携組織の創設に向けての活動となる連合国際シンポジウムの第1回を日本で開催することについて、経緯の説明および提案がなされた。審議の結果、連合国際シンポジウムを来年3月の本学会大会前日に開催する方向で、邑田会長が中心となって検討することが承認された。

5.7 学会誌掲載論文の機関リポジトリへの掲載許諾について

五百川庶務幹事より、国立情報学研究所からの電子図書館登録済み論文データの機関リポジトリへの提供許諾依頼について説明があり、審議の結果、機関リポジトリの動向が未だ不明である等、慎重に検討すべき課題があることから、現時点では本学会誌の掲載論文を機関リポジトリに提供することは許諾しないことに決定した。

庶務報告 (2007年8月～10月)

庶務幹事 五百川 裕

庶務報告では学会が交わした契約、転載許可、連絡、行った会議などで、ニュースレターの他の記事で紹介されていないものをお知らせしています。

・学術著作権協会からの「当協会に委託されている著作物またその他に関する確認事項」について確認を行ない回答した。(9月26日)。

植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウムの報告

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員 菅原 敬

今年の植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム(総合地球環境学研究所プロジェクト後援)は、日本植物学会第71回大会会場(東京理科大学)で9月8日に開催されました。タイトルは、「第四紀における日本列島フロラの成立過程～Refugiaはどこに?～」でした。多くの方に参加していただき、活発な意見交換も行われましたので、今回のシンポジウムの内容についてオーガナイザーの立場からご報告致します。

近年、日本列島の植物地理を分子レベルから研究する方が増え、しかも対象とする植物も様々な植生帯に及び、多くの情報が蓄積されつつあります。しかし、一方で大型植物化石や花粉分析等からの情報が日本列島の植物地理の研究に大きく貢献してきたことも事実です。このシンポでは、大型植物化石や花粉化石から得られている知見、そして分子系統地理から得られている知見に基づいて、最終氷期最盛期に高山帯、冷温帯、照葉樹林帯といった各植生帯のレフュジアが日本列島のどこにあったか、そして現在のフローラがどう成立してきたかという共通のテーマに迫ってみようと思い、次の5人の方に講演をお願いしました。

百原 新(千葉大・園芸): 第四紀の環境変化と植生変遷

高原 光(京都府大・院・農学): 化石花粉からみた最終氷期最盛期における日本列島の植生とRefugia

池田 啓(京都大・院・人環, 日本学術振興会特別研究員 DC1): 高山帯こそが重要なRefugia～第四紀の気候変動と日本列島高山植物の分布域変遷の歴史～

岩崎 貴也(首都大・牧野標本館, 日本学術振興会特別研究員 DC1): 温帯林構成種についての系統情報を用いない複数種比較による考察

青木 京子(京大・院・人環, 日本学術振興会特別研究員 PD): 植物とそれに付く植食性昆虫のDNA多型にもとづく照葉樹林の分布変遷

前半のお二人には、花粉を含む植物化石情報から日本列島古環境の植生や各植生帯のレフュジアの位置について講演していただき、後半の3人には分子情報から各植生帯に分布するいくつかの植物の分布変遷過程について講演していただきました。講演後、コメンテーターのお二人（湯本貴和氏，総合地球環境学研究所；梶田忠氏，千葉大）には、議論を深めるための重要なコメントをいただきました。また、それぞれの講演に、そして総合討論においても討論時間の不足を感じるほど、多くのご質問やご意見をいただきました。この分野への関心の高さをあらためて強く感じました。最後に、興味深い話題を提供して下さった5人の演者の方々、適切なコメントをくださったコメンテーターの方々、そしてこのシンポのオーガナイザーとして中心的な役割を果たして下さった藤井紀行氏（熊本大）に深く感謝致します。

日本植物学会第71回大会「第四紀における日本列島フロラの成立過程～Refugiaはどこに?～」感想記

高山 浩司（千葉大学）

2007年9月8日、日本植物学会第71回大会（東京理科大学）において「第四紀における日本列島フロラの成立過程～Refugiaはどこに?～」のシンポジウムが開催された。会場にはたくさんの方が集まっていて、第四紀の気候変動と植生変遷はナチュラルヒストリーを研究する人にとって、非常に関心の高いテーマであるということが伺えた。前半の演者2人は主に化石解析から、後半の3人は現在分布している動植物の遺伝子解析から、第四紀における環境の変化や植物の分布変遷を議論していた。ヨーロッパでは同様の研究が国際的なプロジェクトとして進められているが、地理的スケールこそ違うものの、データの質や量は勝るとも劣らない研究ばかりで、非常に刺激的なシンポジウムであった。

しかし、シンポジウム全体を通して聞いてみると、やや腑に落ちない点もあった。化石証拠によって気候変動や植生変遷が推定されている場合、遺伝子解析によってそれを裏付けることがどれほど重要な意味を持つの

うか。特にシンポジウムのテーマにもなっていたRefugia地域の特定に関しては、地質年代が明らかな化石データの方が断然強い証拠になるのではないかと感じた。一方で、化石証拠がない場合や、湯本さんのコメントにもあったように、新たなRefugia候補地を見つけるためには、遺伝子解析も有効な手段になるだろう。

今回特に興味深かったのは、同じ植生帯にいる植物が必ずしも同じ遺伝的構造を示すとは限らなかった点である。複数の種に共通して見られる遺伝的構造から、植生変遷全体を議論するというのが従来のスタンスであった。しかし、ある特定の種にしか見られない遺伝的構造に注目し、その進化的あるいは生態的な背景を探るのも今後の展開として面白いのではないかと思う。生物の分布変遷に関わる進化的・生態的背景を明らかにするためには、生態学、遺伝学、系統学など様々な角度からのアプローチが必要となるが、統合的な解析をおこなっていくことで、第四紀の植生変遷に関する研究は更に進展していくだろう。

ニュースレターへの情報提供，寄稿大歓迎です。ご連絡は下記まで。

東 隆行 〒060-0003 札幌市中央区北3条西8 北海道大学植物園

TEL: 011-221-0066 FAX: 011-221-0664 e-mail: azuma@fsc.hokudai.ac.jp

お知らせ

日本植物分類学会第7回大会および2008年度総会のご案内

第7回大会準備委員会

日本植物分類学会第7回大会を以下のように開催いたします。

大会のホームページ <http://www.comp.tmu.ac.jp/bunrui7/index.html>

【会場】 首都大学東京 南大沢キャンパス 6号館 (110教室及び周辺教室)
(発表・総会・シンポジウム)
首都大学生協 (懇親会)
首都大学東京 牧野標本館 2階セミナー室 (編集委員会, 評議員会)

【日程】 2008年3月20日(木)～3月23日(日)
3月20日(木, 祝) 午後 編集委員会, 評議員会 (牧野標本館)
3月21日(金) 午前 口頭発表 (大会発表賞エントリー者),
午後 ポスター発表, 口頭発表 (6号館)
3月22日(土) 午前 口頭発表, 午後 総会, 受賞記念講演 (6号館), 夜 懇親会 (生協)
3月23日(日) 午前 口頭発表, 午後 公開シンポジウム (6号館)

【お問い合わせ先】: 〒192-0397 八王子市南大沢1-1
首都大学東京 牧野標本館 村上 哲明
TEL 042 (677) 2420 FAX 042 (677) 2421
Email: jsps7www@tmu.ac.jp (大会専用)

【発表の要領】

○口頭発表 (一般講演)

発表時間は、講演12分、質疑応答3分の計15分です。発表用として基本的に液晶プロジェクターを用意いたします。どうしてもOHPを使用する必要がある方は、発表申し込みの際にお知らせ下さい。

液晶プロジェクターを用いて発表される方は、ノートパソコンを各自ご用意頂き、操作も発表者自身で行って下さい。液晶プロジェクターの出力解像度はXGA (1024 x 768) です。液晶プロジェクターとパソコンの接続ケーブルは会場に用意されております。ただし、接続コネクタは一般的なD-sub15ピンのもので、このコネクタとお持ちのノートパソコンの映像出力端子が異なる場合は、接続アダプタをご自身でご用意下さい。なお、接続ケーブルは2本用意され、次演者席にて事前に接続・立ち上げを行うことができるようにする予定です。パソコンによっては映像出力が認識されないことがありますので、口頭発表開始前のできるだけ早い時間帯に一度、動作確認をされることをお勧め致します。また、予想外のトラブルに備えて、発表用ファイルのバックアップをUSBメモリー等に入れてお持ち下さい。パソコン用の電源(AC100V)は会場にありますので、必要な方はご利用下さい。

○ポスター

ポスター発表用のパネルのサイズは、横 85cm x 縦 150cm です。パネルの下には脚が付き
ます。(画鋲は大会準備委員会で準備します)。

【発表・参加申込方法】

大会には、日本植物分類学会の会員、非会員を問わず参加していただけますが、大会におけ
る発表に関しては、発表者のうち講演者(口頭発表およびポスター発表で話をする者)が会員
であることを原則としております。非会員の講演者の方は、発表までに日本植物分類学会への
入会手続きをしていただきますようお願い申し上げます。

発表・参加申し込みに関しましては、できる限り電子メールで申込をしてください。本ニュー
スレター 19 ページの「発表・参加申込書」に従って必要事項を入力し、タイトルを「学会申込」
として第 7 回大会専用アドレス jsps7www@tmu.ac.jp へてに添付ファイルで送信してください
(添付ファイル名はご自分のフル名前をお使いください)。送信してから 3 日間経っても(土日・
祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、タイトルを「学会申込再送信」と
した上、同じメールを送信してください。電子メールを利用できない方は、別紙の「発表・参
加申込書」に必要事項を記入の上、大会準備委員会へてにファックスしてください。

【口頭発表賞またはポスター賞へのエントリー】

大会発表賞(口頭発表賞、ポスター発表賞)にエントリーされる方は、「発表・参加申込書」9. 口
頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリーの項目で、(1) する、を選択してください。エントリー
された方の大会における実際の発表形式に応じて自動的に、口頭発表賞、ポスター発表賞、そ
れぞれの候補者として割り振られます。なお、大会発表賞へのエントリー資格のある方は、植
物分類学会の会員で、パーマネント・ポストに就いていない若手研究者(ただし、年齢制限は
特にありません)で、筆頭発表者として実際に口頭、ポスター発表される方本人です。

【口頭発表者・ポスター発表者が求職中であることの表示】

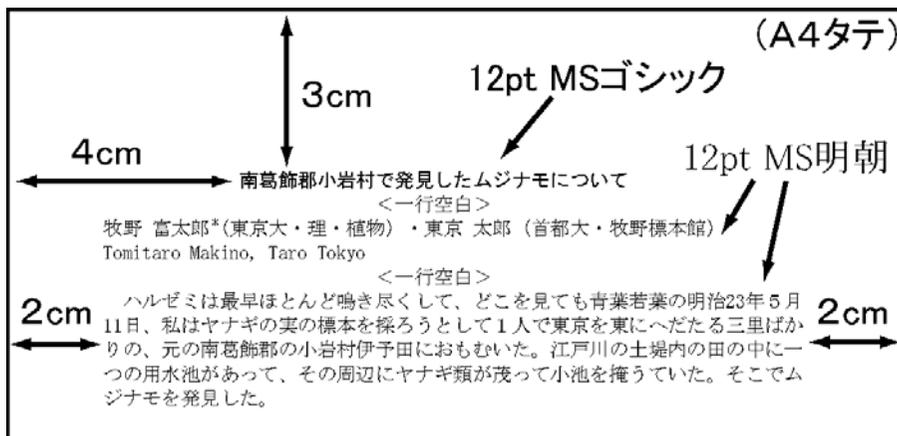
大会発表は若手研究者(大学院生も含む)にとって、同じ分野の人事決定権をもつ先生方
に自分の存在を知ってもらえる絶好の機会でもあります。学位の取得を間近に控えている、ポス
ドクの任期がまもなく修了するなど、現在、求職中の若手研究者にとって、大会は特に重要
なアピールの場であるはずですが、しかし、任期付きの研究・教育職が急増した現在、誰が求職
中なのかは、現在の身分を見ただけでは良くわからなくなってきています。そこで、日本植物
分類学会の大会における新しい試みとして(とりあえず、今回の大会限定の企画とお考え下さ
い)、発表者が現在求職中であることを公表することを希望した場合に限り、そのことがわか
るように発表の際に表示し、また発表要旨集でも、そのことがわかるように印を付けたいと考
えています。表示をご希望の方は、「発表・参加申込書」の 14. 現在求職中の表示の希望のと
ころで、(2) 希望する、を選択してください。

発表・参加申し込み書式は 19 ページにあります。

【発表要旨】

本大会では発表要旨作成のための指定用紙は準備していません。発表要旨の原稿は、下記の作成例に従ってマイクロソフト・ワードを用いて作成してください。左右は2cm、上下は3cmの余白を取り、A4判の用紙1枚に12ポイントのMS明朝あるいはMSゴシックのフォントのみを用いて、34行以内でタイプしてください。発表題目の左には発表番号を印刷するための余白(4cm)が必要です。発表題目、1行空白、発表者氏名(かっこ内に所属)、発表者氏名(英語)、1行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「*」を入れてください。図や表を入れることは可能ですが、文字化けなどをおこすおそれがあることをご承知下さい。要旨はB5サイズに縮小して印刷・製本いたします。原稿のワード・ファイル電子メールの添付書類(ご自分のフル名前をファイル名としてください)として送っていただくか、ファイルの入ったCD-Rを下記住所まで郵送してください。電子メールの場合は、タイトルを「発表要旨」としてjsps7www@tmu.ac.jpあてに送信してください。メール送信してから3日経っても(土日・祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、お手数ですがタイトルを「発表要旨再送信」とした上、同じメールを送信してください。

なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますのでご了承ください。パソコンの機種に依存する特殊文字は、文字化けするおそれがありますので、使用しないでください。マイクロソフト・ワードを使って要旨原稿ファイルを作成することが困難な発表者の方がいらっしゃいましたら、事前に大会準備委員会までご連絡下さい。要旨の作成方法をご相談させていただきます。



【申込の締め切り】

発表者のみ： 発表申込・大会参加費振込 1月21日必着(電子メールまたはFAX)

発表要旨原稿ファイル提出 2月8日必着(電子メールまたは郵便)

その他： 大会申し込み・懇親会申込・参加費振込 2月28日必着

※1月22日以降は料金が割高です。3月1日以降は振り込まずに当日受付で精算して下さい。

【要旨原稿ファイルの送付先】

〒192-0397 八王子市南大沢 1-1 首都大学東京 牧野標本館 村上 哲明

電話 042 (677) 2420 FAX 042 (677) 2421 Email: jsps7www@tmu.ac.jp (大会専用)

【参加費送金先】

口座名義：日本植物分類学会第7回大会準備委員会

郵便振替口座番号：00120-1-357118

※郵便局備え付けの振替用紙をご使用になり、必ず振り込み金額の内訳（氏名・大会参加費・懇親会費・昼食弁当等）を通信欄に記入して下さい。

【大会会場 首都大学東京・南大沢キャンパスへのアクセス】

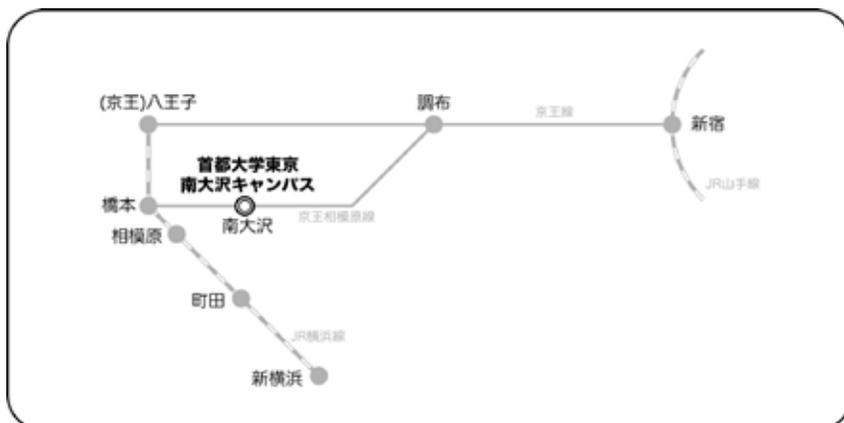
京王線・新宿駅からは、京王線の準特急あるいは特急に乗ってください（行き先はどこのものでもかまいません）。そして、調布駅で橋本行きの特急あるいは快速に乗り換えてください（新宿駅から南大沢駅まで約30～40分）。

東海道新幹線で直接お越しの場合は、新横浜駅でJR横浜線（橋本行き、または八王子行き）に乗り換え、橋本駅で下車して京王線に乗り換えて下さい（新横浜駅から南大沢駅まで約50分、橋本駅から南大沢駅は約5分です）。

首都大学東京 南大沢キャンパス

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1

（京王相模原線・南大沢駅から徒歩5分）



○宿泊施設

都内には多くの宿泊施設がありますので、ご利用ください。京王・相模原線を利用しやすい、橋本駅、新宿駅周辺、あるいは JR 横浜線沿線（橋本駅で京王・相模原線に乗り換え）の相模原駅、町田駅、八王子駅周辺のホテルを利用されるのが便利です。

○自家用車をご利用の方

大会会場には大会参加者用の駐車場はありませんので、会場へは公共の交通機関（電車、バス）をご利用ください。

【参加申し込みと発表申し込み】

大会参加申し込み（割引）と発表申し込み期間は 2007 年 12 月 1 日～2008 年 1 月 21 日

1 月 21 日までに振込の場合 4,000 円（一般） 2,000 円（学生）

1 月 22 日以降振込と当日申込の場合 5,000 円（一般） 3,000 円（学生）

要旨集のみの別売価格 1,000 円

【懇親会】

1 月 21 日までに振込の場合 5,000 円（一般） 3,000 円（学生）

1 月 22 日以降振込と当日申込の場合 6,000 円（一般） 4,000 円（学生）

【昼食】

昼食は南大沢駅周辺のレストラン等でとっていただくことが可能です。しかし、特に土日、周辺は買い物客で非常に賑わっており、レストラン等もかなりの混雑が予想されます。価格も安くありません。そこで、参加申し込みと同時に昼食弁当の予約販売を受け付けます。弁当は、1 食 600 円です。昼食弁当代は、参加費・懇親会費と一緒にお振り込み下さい。なお、弁当は、休憩室（かなり広い 6 号館の 101 教室）で食べていただけます。予約以外の弁当の販売はいたしませんので、ご了承下さい。

【公開シンポジウム】

テーマ「牧野富太郎博士の植物研究とその継承」

公開シンポジウム世話人 村上 哲明

2008 年は、首都大学東京・牧野標本館の設立 50 周年にあたります。そこで、牧野標本館の基となった 40 万点もの植物標本を寄贈された牧野富太郎博士についての公開シンポジウムを企画しました。講演者としては以下の 5 名の方を予定しています。なお、下記の発表タイトルは全て仮題です。詳しい情報は、おって大会ホームページでお知らせします。

大場 秀章 「牧野博士の植物研究と植物画について」

田中 伸幸 「牧野博士の行動録（植物採集日記）について」

菅原 敬 「牧野博士も研究したカンアオイ類について」

畔上 能力 「アマチュア植物研究者による植物研究の展開」

邑田 仁 「牧野博士も研究したテンナンショウ類と牧野図鑑について」

2007 年度日本植物分類学会講演会のご案内

講演会担当委員 布施 静香

2007 年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催いたします。

【日時】 2007 年 12 月 15 日 (土) 10 時 20 分～ 17 時

【講演会場】 兵庫県立人と自然の博物館 ホロンピアホール

〒 559-1546 兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目 (電話: 079-559-2001)

※博物館の観覧券を購入せずに、博物館 4 階入口からお入りください。

(直接ホロンピアホール入口へ行かないでください。当日は案内看板を設置します)

【テーマ】 Flora of Japan

【プログラム】

10:20～10:30 ご挨拶

10:30～11:05 岩槻 邦男 (兵庫県立人と自然の博物館)

「Flora of Japan を地球規模で考える」

11:10～11:45 邑田 仁 (東京大学大学院理学系研究科附属植物園)

「日本産ツチトリモチ科とホンゴウソウ科の広域分布性」

11:50～12:25 副島 顕子 (大阪府立大学理学部)

「*Aster* & *Menispermaceae* —分類学者の迷いと後悔—」

(12:25～13:40 昼休憩)

13:40～14:15 門田 裕一 (国立科学博物館植物研究部)

「日本産キンボウゲ科に関する分類学的研究の現状」

14:20～14:55 田村 実 (大阪市立大学大学院理学研究科)

「日本のユリ科の分類—特にアマドコロ属の分類の改訂を中心にして—」

15:00～15:35 横田 昌嗣 (琉球大学理学部海洋自然科学科)

「ラン科」

15:40～16:15 勝山 輝男 (神奈川県立生命の星・地球博物館)

「スゲ属植物最近の話題」

16:20～16:55 大場 秀章 (東京大学総合研究博物館)

「地球規模での多様性解析からみた日本の植物相—アブラナ科, オトギリソウ科, アカバナ科を例に—」

【その他】

講演会終了後、三田駅近辺で懇親会を予定しています。

【会場までのアクセス】

大阪駅から約 47 分 (JR 三田駅で神戸電鉄に乗り換え), 神戸電鉄「フラワータウン駅」下車徒歩すぐ。

http://hitohaku.jp/top/visitor_info.html

【講演要旨 (執筆は各演者)】

「Flora of Japan を地球規模で考える」

岩槻 邦男 (兵庫県立人と自然の博物館)

講談社版の Flora of Japan は残る単子葉 2 冊を今年度, 来年度に刊行し, 完成するめどが立ってきた。これまでの経緯, 問題点をあげ, 地域植物誌に関する今日的課題を地球的視点で考察したい。

「日本産ツチトリモチ科とホンゴウソウ科の広域分布性」

邑田 仁（東京大学大学院理学系研究科附属植物園）

寄生植物や腐生植物は構造の単純化と特殊化が進んでおり、個体数も少ないので、比較検討が難しい。Flora of Japan で示した新見解とその根拠を、主に写真を用いて説明する。

「*Aster* & *Menispermaceae* —分類学者の迷いと後悔—」

副島 顕子（大阪府立大学理学部）

ツツラフジ科は種数も少なくてもそれほど悩まなくてすみましたが、ごく一部しか担当しなかったシオン属はとてつもなく苦勞して、それなのに後からわかった間違いや、いまだに未解決の問題もあります。告白と訂正を。

「日本産キンポウゲ科に関する分類学的研究の現状」

門田 裕一（国立科学博物館植物研究部）

Flora of Japan Vol. IIa で記載したホクリククサボタンを始め、最近記載した北海道道北地方のソウヤレイジンソウやソウヤキンポウゲ、そして現在取り組んでいるやはり道北地方の低地溪流生キンバイソウ属について紹介します。

「日本のユリ科の分類 —特にアマドコロ属の分類の改訂を中心に—」

田村 実（大阪市立大学大学院理学研究科）

Flora of Japan ではユリ科の中に 44 属を認めたが、そのうち従来の分類からの変更が特に大きかったアマドコロ属に焦点を絞り、なぜ分類を大きく変更するに至ったのか、その理由を中心に話します。

「ラン科」

横田 昌嗣（琉球大学理学部海洋自然科学科）

ラン科は 790 属 19,400 種を含み (Dressler, 1993)、被子植物で最大の科であり、日本には 88 属 270 種以上を産する。サハリンでの野外調査の際に不慮の事故で亡くなられた井上健博士（当時信州大学）とともに筆者はラン科を担当している。日本産のラン科の概要について、特に琉球列島産の種を中心に紹介したい。

「スゲ属植物最近の話題」

勝山 輝男（神奈川県立生命の星・地球博物館）

スゲ属植物では最近になってユキグニハリスゲなどいくつかの新種が記載され、日本新産種の発見も相次いだ。アオスゲ、ホンモンジスゲ、ミヤマカンスゲなど難解なグループの整理も進んだ。これら最新情報を紹介する。

「地球規模での多様性解析からみた日本の植物相 —アブラナ科、オトギリソウ科、アカバナ科を例に—」

大場 秀章（東京大学総合研究博物館）

Flora of Japan では、アブラナ科、オトギリソウ科、アカバナ科等は、地球規模での多様性解析を進める国外研究者が分担した。表記 3 科では、分類体系や種の定義などで従来のものとかかなりの差異があった。これを検討しその背景等を考えてみたい。

2008 年度野外研修会開催地の募集

庶務幹事 五百川 裕

2008 年度野外研修会開催地の募集をいたします。野外研修会は現学会の母体の一つである植物分類地理学会創設の 1933 年から開催されてきた伝統ある行事です(村田 2001, ニュースレター 1 号:15-17)。学会統合後も年 1 回開催しており, 来年度も開催を予定しております。2001 年以降は, 埼玉県秩父, 宮崎県宮崎~延岡, 徳島県那賀川沿い・外ノ牟井ノ浜, 愛知県・岐阜県東濃地方, 岐阜県徳山ダム周辺・伊吹山, 鹿児島県種子島, 岡山県・広島県阿哲地域を開催地として, 5 月から 11 月の間の適期に 1 泊 2 日または 2 泊 3 日で実施しております。地元の植物を多くの同好の方々に紹介いただき, 地域フロラに関する研究成果を共有し, 実物を前にして議論して, 植物分類の理解を深めるよい機会となるかと思えます。野外研修会の開催をお引き受けくださる(あるいは場合によっては引き受けても良い)という会員の方がおられましたら, 2007 年 12 月 21 日までに庶務幹事宛(下記)にご連絡をお願いいたします。

〒 943-8512 上越市山屋敷町 1

上越教育大学学校教育学部内

日本植物分類学会事務局(庶務幹事 五百川 裕)

TEL & FAX : 025-521-3430 e-mail : iokawa@juen.ac.jp

ハーバリウム紹介

九州大学のハーバリウムと所蔵植物標本のご紹介

三島 美佐子(九州大学)

九州大学に植物標本やハーバリウム(らしきもの)があるのを知っている人は, 実はそう多くはないかもしれない。実際のところ, 存在しているのは, ハーバリウムという名の「夏の灼熱・ナフタレン地獄」だ。それは箱崎キャンパス中央図書館 5 階(そもそもこの階の存在は, 図書館職員くらいしか知らないのではないだろうか?)にある, 6, 7 スパンほどの部屋をさす。「金平コレクション」「初島コレクション」「中島コレクション」「竹内コレクション」と呼ばれるものが, どっしりとした古い木造りの標本箱に収められ, 部屋の 4 分の 3 ほどを占めている(図 1, 2)。古ばけたブラインドが南陽を遮ってくれるものの, 空調もなく最上階であるこの部屋は, 真夏に入室すれば数分で汗が噴き出し, 減量にはいいかもしれないが, 標本には最悪の環境であ

る(実際のところは人にとっても最悪)。とはいえ, 第二次大戦以降, 植物分類学プロパーの研究室が途絶えてしまった九大のなかで,



図 1. 図書館 5 階にある標本室。ちなみにこれは, 2005 年 3 月の福岡県西方沖地震以前に撮影されたもの。地震のせいで棚がずれてちぐはぐになってしまい, こういう整然とした感じは, もはやない。右端に写っているような果実標本棚の戸も, 落ちて外れたまま, はまらなくなっていたりする。地震の直後, 標本庫の状態を見ていた時に余震が来た時は, 怖かった…。(撮影: 福博印刷)

それでも標本の価値を理解していた教官らの尽力と中央図書館の厚意で、今のこの場所に標本が救済されたのだから、その尽力には敬意を表したい。これが Index Herbariorum に登録されている、由緒正しい植物標本庫 FU である。戦前福岡で自然史研究が興隆し、それを支える研究者らが、九大農学部の栽培学教室と林学教室に結集していた頃の「名残り」である。

この図書館5階の他に、福岡市の北西、箱崎から車で2、30分のところにある粕屋演習林にも、小さな標本庫（という名のコンクリ倉庫）がある。こちらには、「初島コレクション」の一部と、粕屋演習林で集められたものが保管されている。ここにある「初島コレクション」の一部は、大型段ボール60箱強で、山積みになっている。ここに来た経緯は色々あったらしいが、私は詳細を把握していない。3年ほど前の底冷えする2月、アルバイト学生さんと一緒に、とりあえず点数と分類群だけ調べたことがある。その時タイプ標本が数点でてきたが、残念ながら、もはやタイプ標本としての役割を果たせない状態であった。

上記コレクションの全ては、戦前から戦中の標本である（表1参照）。最近の標本は1970年代あたりからのもので、総合研究博物館に寄贈された福岡植物研究会の標本と、矢原教授の着任以来、理学部生態学教室で集められてきた中南米・屋久島などの標本である。国内のものは、福岡を中心とした九州一円に強い。逆にいうと、他の地域の標本類は、



図2. 種子標本の一例。金平コレクションは、果実・種子の標本も多い。このような瓶詰めもあるが、*Pandanus* の大きい果実は、針金でくくられ、棚にごろごろと置いてある。（撮影：福博印刷）

あんまりない。国外のものは、南洋群島（金平コレクション）が有名であろう。旧帝大時代の北鮮・南鮮・台湾・樺太各演習林からのもの（初島コレクション）も、貴重である。なお、現時点で矢原コレクションの中核をなす中南米標本は、お祭りのとおり、ほとんどキク科である。

金平コレクションといえば、ミクロネシア・ニューギニア・*Pandanus* だが（図2）、ひっそりとした標本棚が1つある。扉をあけると、小引き出しの正面に、「薬用植物」「有用植物」など、カテゴリごとのラベルが貼ってある。「有用植物」に入っていたバニラは、ナフトレン臭の合間に、数十年の時を経てもなお、ほんのりと甘い香りを漂わせている。この箱は、早急にデータベース化をすすめたいものの一つだ。標本データベースを公開することで、

表1. 九大所蔵の主な植物標本類一覧。

コレクション名	標本点数	管理部局	主な採集地
金平コレクション	約 20,000	農学研究院	ミクロネシア・ニューギニア・台湾
竹内コレクション	約 10,000	農学研究院	九州
中島コレクション	約 8,300	熱帯農学研究センター	福岡県
初島コレクション	約 15,200	農学研究院	台湾・朝鮮半島・樺太・九州
福岡植物研究会コレクション	約 50,000	総合研究博物館	福岡を中心とした九州
矢原コレクション	約 14,000	理学研究院	中南米・東南アジア・日本

台湾や東南アジアに縁のある標本の存在が知られることになり、先方との交流も進むようになるだろう。

表1のコレクション概要でおわかりいただけるように、九大全体の植物標本の点数は、12万点ほどである。点数としては非常にコンパクトであるので、整理しやすいはずである（と思うことにしている）。ここ数年データベース化を進め、不完全ながら試験公開しつつあるが、まだまだである（そういえば私は分類学会のデータベース委員でもあったような…）。この4年間、標本整理やデータベース化の最大のネックは、スペースであった。しかしこの9月、箱崎の工学部が全て伊都キャンパスに移転し終えたことで跡地利用が可能となり、標本収蔵と整理のためのスペースを、旧工学部本館の3階に確保することができた



図3. 引っ越し先の旧工学部本館。西ウイング（写真向かって左側）の3階に職員居室と、新たな標本室を確保できるようになった。博物館の伊都キャンパスへの移転は、13年後と言われている。もはやこの歴史的建物（1930年築）を博物館か展示室にしてはどうかという話も、あるとかないとか…。(撮影：三島美佐子)

(図3, 4)。これでようやく、福岡植物研究会からの寄贈標本の受け入れを再開することができるし、人が作業できる環境のもとで、標本を傍らにしたデータベース作業も可能になるだろう。そのようなわけで、今更とあきれられてしまうかもしれないが、ようやく「使える標本庫」造りに取り組みそうである。なんといっても、♪使って♪使って♪使って♪ナンボ、♪使ってナンボの標本庫♪

図書館5階の標本は閲覧可能である。研究上必要な方は、植物分野主任の矢原さんにまずは御連絡下さい。福岡植物研究会からの寄贈標本など、図書館5階にある分以外の標本類は、引っ越しと整理の為、当面閲覧不能であることをご了承下さい。



図4. 植物標本室になる予定の部屋。もともと図書室で、右奥に見える部屋は中二階の書庫になっており、配架書棚が組まれている。この一階に標本棚を置き、階上には福岡植物研究会の受け入れ標本を段ボール箱のまま保管する予定。前室に予定している閲覧室などには、地図やフロラを充実させたいと思っている。今のところ、寄贈いただいた国内フロラが若干あるのみなので、古今の地図や国内外のフロラの寄贈、大歓迎です。(撮影：三島美佐子)

標本閲覧申込先

〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学大学院理学研究院生態科学講座
矢原 徹一
Tel:092-642-2622, Fax: 092-642-2645, tyahascb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

地図・フロラ・標本寄贈等、その他問い合わせ先

〒 812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1 九州大学総合研究博物館
三島 美佐子
Tel:092-642-4298, Fax: 092-642-4299, mishima@museum.kyushu-u.ac.jp

いきもの便り

世界遺産の遺産に

西野 貴子 (大阪府立大学)

「ないわけない！なんで？」…感嘆符と疑問符をまき散らしながら溪流沿いの岩場に目を凝らした。確かにいたのだ、5年前、7年前にも、そして十ウン年前にも。ずっとこの四畳半ほどの広さの岩場に200個体近いホソバノギクが生育していたのだ。この谷底に下る山道は人通りがなくなったのか、藪に覆われだいぶ崩れた箇所ができていた。途中にあった一軒の小屋も廃屋と化していた。どうも人為的な影響で消失したのではなさそうである。5年前の写真と見較べても岩の配置はほとんど変化なく、サツキもさほど成長せずそのままにある。ただホソバノギクだけが小さな2個体を残して忽然と消えた。岸からのアプローチができないので、自慢の浮力を生かすべく初秋の冷たい清流を泳いでみたが、近くの岩場にもホソバノギクは見つけられなかった。考えられるのは岩場の表面を軒並み剥ぎ取ってしまうような出水か…。カタストロフィの中心から逸れていたのか、隣の岩盤にはドロニガナやホソバノギクが涼しげに驟雨に打たれていた。



ホソバノギク。一番手前の頭花にはヒメヒラタアブ類が訪花中。このほか、マルボシヒラタヤドリバエも訪花しており、小花数の少ない頭花も天気の良い日にはそこそこの繁盛ぶりである。

こうして卒論生とはじめたホソバノギク集団の遺伝的解析は、溪流沿い植物にふさわしく崖っぺちからのスタートとなった。

シオン (*Aster*) 属のホソバノギクは種小名を *sohayakiensis* というが、紀伊半島の溪流沿いのみの分布で絶滅危惧 IA 類である。絶滅危惧になるのも然もありなん。紀伊半島は多雨に削られた急峻な山地ばかりで、手っ取り早く道を通せるのは谷沿いしかない。その谷の溪流岸は砂岩と泥岩の互層のために非常に脆く、始終崩れる。崩れては護岸工事をし、その工事で荒れた近隣の岸がまた崩れていくという魘ごっこが繰り返されている。道とホソバノギクは共存できない。憐れ、ホソバノギクの運命やいかに…。

そこに救世主が現れた。溪流沿い植物にとっては、であるが。南海・東南海地震対策や吉野・熊野の世界遺産登録のおかげか、紀伊半島の内陸部は大規模な道路工事があちこちで進行中なのだ。くねる狭隘な山道を放棄し、一直線の長いトンネル、SF さながらに谷底から聳える高い橋梁…『酷道』と名高かった国道が谷底から離れた。最新と薦められたカーナビ



クルマギクで吸蜜するアサギマダラ。翅に福島県のグランデコススキー場で標識された個体であるマーキングがあった。移動日数 58 日目とのこと。メインルートからやや東よりに外れて翔んでいたらしい (アサギマダラの情報は大阪府立大学生命環境科学部の平井先生にご教示いただいた)。(撮影：ともに西野貴子)

が「車が空を飛んでいる」と何度も表示してきたほどの様変わりである。

放棄された谷底の旧国道の崖に絶滅危惧 IB 類のクルマギクを見つけた。福島で標識され約 600km を渡ってきた南下中のアサギマダラがのんびりと吸蜜している。カメラを構えたために曲げた腰を伸ばし、空を見上げながら醜悪な光景と思っていた橋梁を下から眺めた。これなら溪流沿い植物は残るだろう。しかし交通の便がよくなった反面、熊野古道周

辺の植生は激増した観光客の影響を受けているという。また別の植物の心配をしなければならぬのかもしれない…。

えっ？ホソバノギクの解析結果？局所集団が誕生と消滅をくりかえしながら飛石状に存在していれば、全体で大きな交配集団として多様性を維持しているらしい。道がなくなり人が通らねば安泰だろう。いつかまた再調査するならば、ラフティングを習得するか河童を雇うか考えよう。

チイ便り・5 ～トナカイゴケを食べるトナカイの秘密～

大村 嘉人 (国立環境研究所)

クリスマスが近づくと、マスコミでもしばしば話題になる地衣類がある。トナカイゴケである。説明するまでもないが、サンタ→トナカイ→トナカイゴケと連想されるようだ。トナカイゴケとはハナゴケ (*Cladonia rangiferina*) の別名である。学名の種小名はトナカイの属名 *Rangifer* に由来する。地衣体がトナカイの角のように分枝していることから、そのように呼ばれているようだ。

トナカイゴケなどの地上性の地衣類は、トナカイにとって冬場の主要な食料となることがよく知られている。冬場は地衣類以外にろくな食べ物がないから、仕方なく食べているのかというと、実はそうではない。夏場でも地衣類を食べているし、様々な種類の植物や家畜用飼料などを並べると、多くの場合地衣類を最初に選んで食べるという実験結果もあることから、どうやら好物のようである。ちなみに本当のコケ(蘚苔類)は全く食べない。さらに、地衣類であれば何でも良いというわけではなく、種類によって好き嫌いがあるそうだ。これは含有成分の違いによるものであり、地衣類研究者が呈色反応や化学分析をして区別しているものを、トナカイは本能的に区別しているらしい。

トナカイゴケの栄養素は、ほとんどが炭水化物(全体の 72-95%)で、タンパク質(1-5%)やミネラルなどは非常に少ない。さすがに好

物であっても地衣類だけでは、栄養が不足してしまうが、夏には草木を、秋にはキノコなどを旺盛に食べるので、年間を通してはバランスがとれているようである。

トナカイは、胃の中の細菌が作るリケナーゼと呼ばれる特別な酵素の助けによって地衣類の炭水化物の約 90% を消化でき、ほとんどを栄養分にしている。羊や牛などの家畜が 60% 程度しか消化できないことと比べると、トナカイは地衣類を食べることに適しているのが分かる。

1986 年のチェルノブイリ原発事故では、大気中に放出された放射性核種が地衣体に蓄積し、地衣類を食料とするトナカイから、その肉を食べるヒトへの食物連鎖によって、二次的に重大な被爆を引き起こした。トナカイと地衣類の密接な関係であったが故の、不幸な事故となってしまった。



トナカイゴケとも呼ばれるハナゴケ。(撮影:大村嘉人)

